

# 授業と家庭学習の相乗効果で 学力と自ら学ぶ習慣を育む

家庭学習は何のためのものか。日々の指導を、子どもの学力や学習習慣につなげるためにはどうすればよいか。家庭学習の現状や課題、必要な視点について、  
帝京大教職大学院の矢野英明客員准教授と、  
矢野先生の指導の下で校内研究を進める神奈川県平塚市立神田小学校の田中千勢子校長に聞いた。

## なぜ家庭学習は必要か

——まず、「家庭学習」と「宿題」をどのように捉えればよいでしょうか。

**矢野** 教師が「やってきなさい」と課す課題が「宿題」で、「宿題」に加え、子どもが家庭で自主的に取り組む自主学習も含めた、家庭での学びのすべてが「家庭学習」と言えるでしょう。

**田中** 宿題と家庭学習の言葉を区別せずに使う学校は多いと思います。また、家庭学習は大切だと感じながら、なぜ大切なのかをしっかりと議論してこなかったように思います。

**矢野** おっしゃる通りだと思います。改めて、

家庭学習が大切な理由は、二つあります。一つめは、今後求められる力を育むには、授業と家庭学習、学校と家庭の相乗効果が必要になるため。二つめは、子どもが自ら学ぶ習慣を付けるためです。

——一つめの「相乗効果が必要」とはどのようなことですか。

**矢野** これからは、基礎的・基本的な知識・技能だけではなく、それらを活用して課題を解決できる思考力・判断力・表現力が求められます。これらの力を付けるためには、授業が中心であることは間違いありません。しか

## ポイント

- 家庭学習は、思考力等の今後求められる力や、自ら学ぶ学習習慣を付けるために必要
- 個々の子どもに付けたい力の本質に立ち返り、授業と家庭学習に必要なことを考える
- 保護者にも、家庭学習の考え方や、協力してほしいことを伝える
- 新課程の全面実施となる2011年度は家庭学習を見直すのに適した時期。学校全体で考えていく機会にする

し、実生活で生きる力を付けるには、教室の中だけでなく、学んだことと実生活との結び付きを考えたり、学んだことが日常生活でどう生かされるのかを体験したりするなどの、家庭での学習が欠かせません。このことは、新学習指導要領にも示されています(図1)。

**田中** 2007年度に本校に着任した当時、子どもが落ち着いて授業に参加できない状態をどうにかしたいと考えました。まず授業を子どもにとって分かるもの、楽しいものにしようと、最優先で授業改善に取り組んできました。授業に向かう姿勢は出来てきましたが、それだけでは更なる学力向上に限界があるのではないかと感じるようになりました。この経験から、子どもの学力向上には家庭と連携

# 授業づくりと共に深める家庭学習

たなか・ちせこ◎平塚市立小学校教諭、神奈川県教育委員会教職員課副主幹、義務教育課指導主事・同課長代理等を経て、現職。平塚市立神田小学校◎神奈川県のほぼ中央部に位置する平塚市北東部の住宅街にある。学校経営構想「学びの定着と継続」に向けて家庭学習の検討を進める。児童数は483人。

**神奈川県平塚市立神田小学校  
田中千勢子 校長**



やの・ひであき◎神奈川県内の小学校教諭、校長などを経て現職。中央教育審議会教育課程部会理科専門部会委員。専門は理科教育、教育課程。著作に「家庭学習との関連」（無藤隆・嶋野道弘編、ぎょうせい）『学習指導の工夫改善と充実』（第6章）など。

**帝京大教職大学院教職研究科  
矢野英明 客員准教授**

## 図1 新学習指導要領 第1章 総則

### 第1 教育課程編成の一般方針・1からの抜粋

学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、児童に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。その際、児童の発達の段階を考慮して、児童の言語活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、児童の学習習慣が確立するよう配慮しなければならない。

\*下線部分は編集部加筆

した家庭学習が必要だと考えるようになりました。

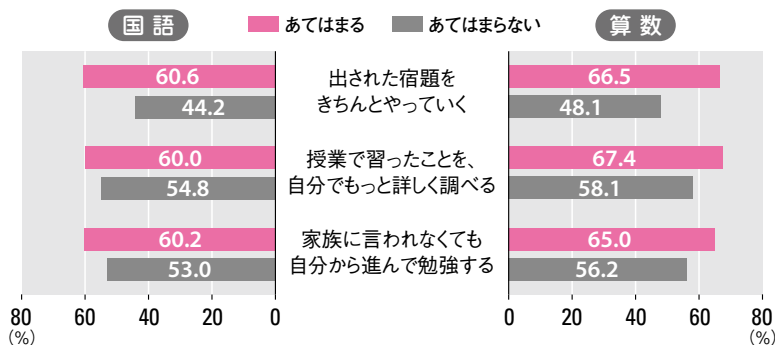
**矢野** 思考力などを育むには、授業で子ども自身が考えたり、学級内で考えを深め合ったりする時間を十分に確保することも必要です。限りある時間で子どもを最大限伸ばすためには、授業だけではなく、家庭での学習時間も併せて考えることが大切なのです。――二つめの「自ら学ぶ習慣を付けるため」とはどのようなことですか。

**田中** 最終的に、勉強は一人でしていくものだと思います。どこかの段階でその姿勢を身に付けなくてはなりません。授業だけでは時間に限りがあり、自ら学習する習慣を育むために、家庭学習は大切だと思います。

**矢野** 自ら学ぶ学習習慣がなければ、教師や

## 図2 家庭学習の様子と正答率の関係(5年生)

### ■国語・算数の平均正答率(家での学習の様子別)



注)「あてはまる」「あてはまらない」のそれぞれについて、共通問題での平均正答率を示している。「まああてはまる」「無回答・不明」の平均正答率は省略した

出典: Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査・学力実態調査」調査時期は2006年11月、調査対象は「第4回学習基本調査・国内調査」の対象者のうち、小学5年生2,446人、中学2年生1,723人

保護者、塾から言われたことをこなすだけの子どもになってしまいます。

**田中** 学習習慣が身に付いている子どもとそうでない子どもは、学習意欲が全く違います。学習習慣が身に付いていれば、自分のペースで学び直し、理解することも出来ます。前時までの学習を自分のものにした子どもは、「次の授業では何を学べるのか」という気持ちで授業に臨んでいます。

**矢野** これは、授業に対する「構え」と言えます。構えのある子どもは、教科書やノートを

開いて授業が始まるのを待っています。家庭学習習慣が身に付いている子どもの方が正答率が高いというデータがありますが（P.5図

## 家庭学習指導の現状と課題

——家庭学習の指導上の課題は、どのようなことでしょうか。

**矢野** 大きく2点あります。1点目は、多くの学校が学習内容を検討しないまま家庭学習指導をしているため、子どもが必要を感じて勉強できていないことです。どんな日でも漢字や計算を宿題にするなど、授業や個々の子どもの課題と関係のない無味乾燥な内容が一律に課され、学力の向上に結び付いていないこともあるのではないのでしょうか。子ども

も「指示された宿題をすればよい」と形式的に取り組んでいることが多いと思います。こうした現状に対して、実際、校長先生が課題意識を持っていることが『VIEW21』のアンケートからもうかがえます（図3）。

**田中** 本校でも、どの学級もほぼ毎日宿題を出しています。授業内容や基礎・基本の定着を図りたいと願い、全員の子どもにも取り組ませるために、かなりの労力を割いています。ところが、なかなか学力の向上や学習習慣の定着に結び付いていかないことが課題です。

**矢野** 「勉強しよう」という気持ちがわかない

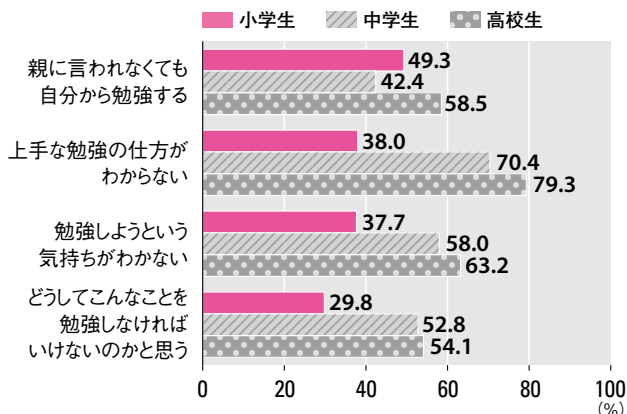
2）、これは単に学習時間が長いからというだけでなく、学習への構えがあることが正答率の高さに結び付いていると考えられます。

という子どもは小学生の3割以上いて、中学校以降は更に増えています（図4）。諸外国に比べ、日本では学習の大切さを実感する子どもが少ないという結果（図5）とも関連しているのではないのでしょうか。

**田中** つまづく点は子どもによって違うため、一律に課す宿題には限界があります。ただ、個々の子どもに応じた宿題を出したい、内容の工夫をしたいと思っても、多忙で難しいことも事実です。授業や校務で手一杯の先生方に、「家庭学習についてもっと考えてください」とはなかなか言えません。他の検討課題が多数あり、家庭学習は議論の中心となりにくいということもあります。

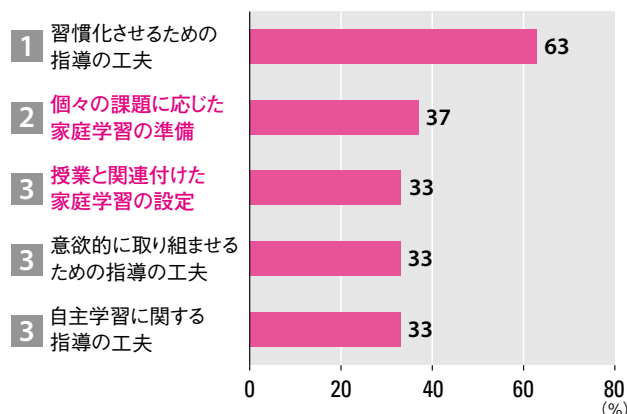
**矢野** 2点目の課題は、宿題や家庭学習の意義を保護者に伝えられていないことです。保護者が「宿題は出たの？ やりなさい」というだけでは、子どもは学ぶ意味や面白さを感じられず、意欲も湧かないでしょう。保護者が「勉強は学校でするもの、保護者はかかわらないもの」という意識を持っている限りは、家庭学習の充実は難しいと思います。

図4 勉強の取り組み方(学校段階別、4～6年生)



注)「とてもそう」「まあそう」の合計。小学生は4～6年生  
出典：Benesse教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」調査時期は2009年8～10月、調査対象は全国の小学4年生～高校2年生(小学生は3,561人)

図3 家庭学習の指導上の課題(校長のみ)



注)「課題は感じていない」の選択肢を含め、当てはまるものを3つまで選択。上位5項目  
出典：『VIEW21』小学版 読者モニターアンケート 調査時期は2010年8～9月、調査対象は『VIEW21』小学版読者モニターのうち、小学校校長27人

# 授業づくりと共に深める家庭学習

## 学力と意欲を高める家庭学習とは

——課題の1点目の対策としては、どのような取り組みが考えられますか。

**矢野** どのような力を子どもに付けたいのか、その本質を考え、まずは授業を改善することです。おのずと、家庭での学びの必要性や内容も見えてくるでしょう。例えば、理科でメダカのオスとメスについて学習する場面では、メダカのような小さな生き物にもオスとメスがいて、種の保存をしているという生命の仕組みを知り、その不思議さを実感することが授業のねらいです。授業で生命の素晴らしさを伝えた上で、他の動物の種の保存について確認する宿題を課せば、学んだことを実感を伴って理解できますし、学ぶ面白さも感じられます。加えて、個々の子どもに合わせた課題設定も大切です。全員が個別ではなくとも、レベルを変えた3種類ほどのプリントを用意するだけでも、学習効果はかなり高まります。先生方はとても忙しいと思いますが、それが子どもの力に結び付くことであれば、「忙しい」とは感じないはずですよ。

**田中** 本校でも、何種類かのプリントを用意し、子どもが自分に合ったものを選んで取り組む方法をとっている学級もあります。

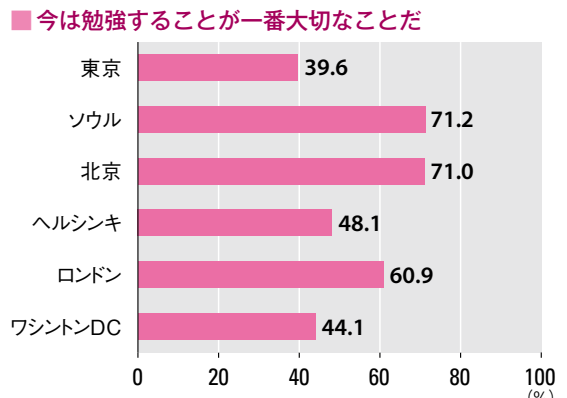
**矢野** 子どもに自分で選ばせるのは、良い方法ですね。最初は、レベルが合わないものを

選ぶ子どもがいるかもしれませんが、最終的には自分に適した難易度のものを選ぶようになります。「自分の力に合ったと思う問題プリントを取ってください」とするだけでも、自分で選んだという気持ちから意欲は高まります。「次はもっと頑張ってみよう」という向上心も期待できます。

**田中** 取り組んできた内容に目を通すことも有効な方法です。家庭学習用のノートに教師が励ましのコメントを付けたり、「次はこんなことに挑戦してごらん」と課題を示すと、子どもが意欲的に取り組むようになります。教師の助言により「これまでは計算問題ばかりだったけど、調べ学習もしてみよう」など、自身の課題に気付くこともあります。

**矢野** 子どもが自己評価をするための一つの機会ですね。普段は難しくても、長期休業の時だけでも個々の課題に取り組む機会にするのはどうでしょうか。私は学級担任をしていた時、夏休みの宿題を一人ひとりの子どもと相談して決めていました。例えば、「小説を書いてみたい」という子どもには「やってごらんなさい」と意思を尊重する一方で、「あなたは算数のこの部分が少し苦手だから、これもやってみてはどう？」と提案するのです。一律に課されるのとは違い、自分で納得した

図5 「勉強すること」の価値(10~11歳)



注) 数値は「あなたは、次のように思うことがありますか」(複数回答)に対して選択した子どもの比率  
 出典: Benesse教育研究開発センター「学習基本調査・国際6都市調査」調査時期は2006年6月~07年1月、調査対象は上記6都市の10~11歳(5,972人)

宿題なので子どもは意欲的に取り組みますし、個別の課題も克服できます。

——2点目の課題についてはどうでしょうか。

**矢野** 学びは「学校」と「家庭」の両輪で育むもので、保護者の役割は子どもの頑張りを認め、励ますことだと、保護者に伝えることです。「この前は出来なかったことが出来るようになったね」「ずいぶん上手になったね」などの一言で、子どもは学びを通して自分が成長していることを実感できます。学びへ向かう姿勢だけでなく、「生きる力」の基盤としての、自分への自信と誇りを持たせることも出来ます。

**田中** 保護者の方へは、このようなかわり方を、保護者会などでお願いする必要がありますね。「家庭学習へのかかわり方が分からな

い」という声もよく聞きます。

**矢野** 保護者へは、かみ砕いた言葉で伝えることが大切です。「生きる力の育成のために」などの言葉ではなく、「お子さんに自信と誇りを持たせるために」と言えば、思いを共有できると思います。また、かわり方は具体例を示しながら話すと良いと思います。例えば、算数では一緒に家の中の球体を探す、理科では月の動きと一緒にペランダから見てもらう、家庭科では夕食作りを手伝わせる、などです。なお、子どもの学びにおける保護者の役割は、「子どもを認めることと励まし」ですが、教師はこれに加えて「学び方を指導する」ことが必要です。次に取り組みべき課題を示したり、「総合的な学習の時間」で学んだ調査方法が別の教科に生かせることを示すなどして、学び方を広げるようにすることが大切です。

**田中** 教師は、子どもの学習の状況を常にかんている必要がありますね。つまずいた箇所などを見極め、次の投げ掛けを考えなくてはいいけません。

## 学校全体での 取り組み方

最後に、家庭学習を学校全体で考えてい

## 神奈川県 平塚市立神田小学校の 実践

### 教師全員で家庭学習の在り方を議論

#### 学力向上への意識の高まりの上に 家庭学習を含めた構想を提案

平塚市立神田小学校は、学校経営構想「学びの定着と継続」の具体化を進めている。この構想は、①学校研究、②授業づくり、③家庭との連携、④児童指導、の四つのブロックから成る(図6)。学校全体の方針を検討する企画会議の委員がそれぞれのブロックを担当し、それぞれの視点から学校づくりを考える。

「家庭との連携」では、保護者との連携を軸とした家庭学習の習慣化の他、家庭への啓発や生活習慣の確立などを模索している。

「まずは授業の質を高めることに力を注ぎ、2年間をかけて授業が徐々に改善されてきた段階で、家庭学習も含めて学力向上の方針をつくりたいと考えました。『学びの継続』という言葉には、家庭と学校、学年間、学校間へつながるといふ願いを込めています」(田中校長)

矢野准教授の指導を受けながら取り組んだ授業研究において、特に重視したのは「子どもへの思い」だ。研究授業を参観する教師は、担当する子どもを決め、一人ひとりがどのよ



平塚市立神田小学校  
5学年担任。「子どもが最終的に一人で問題を解決できるようにするため  
の手助けをしていきたい」  
**山田千夏**  
Yamada Chinatsu



平塚市立神田小学校  
教務主任。「長期的視点に立って物事を考え、学年を超えて共に学び、共に育っていきたい」  
**田中みどり**  
Tanaka Midori

図6 「学びの定着と継続」構想図



\*同校の資料を基に編集部で作成

## 授業づくりと共に深める家庭学習

くためのポイントや手順をお聞かせください。

**田中** 学年ごとに指導が違っては、小学校6年間で、力を育み、自ら学びへ向かう姿勢を育てることは出来ません。系統性のある指導をするために、学校全体としての方針を共有することが必要だと思います。

**矢野** 新課程が全面実施となる11年度は、学校全体で家庭学習を考えるのに適した時期です。次のような流れで、1年後くらいに改善の方向性を出せるよう考えてみてはいかがでしょうか。

- ① 年度当初に、校長としての方針を示す
- ② 方針に照らし合わせ、個々の教師が夏休みまでを目安に家庭学習指導を実践してみる
- ③ 夏休みに1学期の実践を全員で振り返り、実施状況と課題を集約する
- ④ 改善案を考えたり試行したりしながら、現状と課題の洗い出しを続ける
- ⑤ 1年間を通じて出てきた課題と改善点を基に、次年度からの方針をまとめる

**田中** 本校でも、全員で考え方を共有していくことが大切だと思います。いつも学校全体で検討するようにしてきました。全員が共通理解することを重視して少しずつ歩みを進めているという状態ですが、11年度へ向けて方針を固めていきたいと思っています（神田小学校の検討の様子は下部参照）。

——本日はありがとうございました。

うな表情や反応を見せるかを細かく観察し、それを基に議論した。指導技術だけではなく、子どもの姿に重点を置いたことで、次第に教師が子どもの目線から授業づくりを考えるようになっていった。

### 全員で検討しながら 1年間をかけて方針を策定

同校では、家庭学習についてはそれぞれの教師が学級の実態を考えながら取り組んでいた。10年度中に11年度以降の方針の策定を予定し、次のような体制で検討を重ねてきた。

- ① 09年度8月に「学びの定着と継続」の構想の枠組みを提案
- ② ブロックごとに具体的な取り組み内容について話し合いを重ね、校長、教頭と各ブロックのリーダーが参加する月1回の企画会議で検討
- ③ 10年度1学期に、家庭学習や宿題について、教師全員にアンケートを実施。学年やブロックで、指導の現状や課題を話し合う
- ④ 10年度1学期終了後に「1学期を振り返る会」を実施。1学期に実践したことや、思いなどを交流
- ⑤ 10年度2学期には11年度から取り組んでいく家庭学習の考え方、進め方を職員会議で検討し、学校としての考え方を策定  
「家庭との連携」ブロックのリーダーを務

める教務主任の田中みどり先生は、次のように話す。

「個々に任せていた家庭学習を、学校として考え進めていくには、課題がいくつかあります。学校だけ、授業だけでは基礎・基本の習熟を図ることは出来ませんし、宿題だけでは家庭での学習の習慣化にはなかなかつかないと思います。そこで、宿題の良さを生かしながら、子どもの主体的な学びにしたいために、子ども自身が課題を選択するという方法を取り入れることにしました。そこから自らの学びに移行するために、選択の幅を学年的実態に合わせて広げ、いずれは、自分に合った課題や興味・関心を持った学習に、進んで取り組んでいくことが出来るようにしたいと考えました」

教職歴2年の山田千夏先生は、変わってきた子どもの様子を次のように話す。

「今までは、宿題だったため、与えられたものに取り組みば安心だったようですが、家庭学習を始めると、自ら課題を見つけ、計画的に学習するようになりました。また、自分が興味を持ったことを意欲的に追究するようになり、さまざまな出来事に目が向くようになりました」

10年度の2月には、保護者と共に家庭学習について矢野准教授の話を聞く機会を設ける。これまでの検討内容と併せて、方針を確定させ、11年度からの実践につなげる考えだ。